プレスリリース

平成２０年１０月７日

独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）
生物系特定産業技術研究支援センター（生研センター）

# 『農業機械の圃場間移動に関する現状調査結果』を発表

農業経営の安定化を図るため、土地利用型農業では規模拡大が進められていますが、近年、農業者からは、圃場間を移動する機会が増えていることや、農道整備が進み、一般車輌が農道へ進入することが多く、危ない思いをする等の意見が聞かれるようになりました。

このような背景から、生研センターでは、農業者の要望や移動時の問題点を把握するため、(社)日本農業機械化協会の協力を得て平成19年度にアンケート（依頼413名、回答233名）を実施しました。この分析結果を報告書として近日中に刊行します。得られた情報は、関係各方面で有効に活用して頂くことを希望します。また、今後の安全研究等にも活用していきます。結果の概要を以下に示すとともに、グラフを別紙に示します。

１．回答者の概要

回答者の経営面積の平均は12haで、1ha以上５ha未満が31％と最も多く、次に５ha以上10ha未満が26％、10ha以上20ha未満が22％で、比較的大規模経営の農業者が多い結果となりました。

２．乗用型トラクタの高速化へのニーズ

１）１日当たりの耕うん作業時間の平均は６時間程度で、８時間以上は全体の40％でした。また、１日当たりの移動時間の平均は0.5時間程度で、１時間以上は18％でした。

２）回答者のうち、73％が経営面積を増やすために高速化は有効であると回答し、また、62％が高速化を望むと回答しており、高速化に対するニーズが示されました。

３）希望する最高速度が35km/h以上である回答者の割合は、経営規模10ha未満では21％、10ha以上では48％であり、規模が大きい方が最高速度の速いトラクタを望んでいました。

３．乗用型トラクタの圃場間移動の際の危険状況

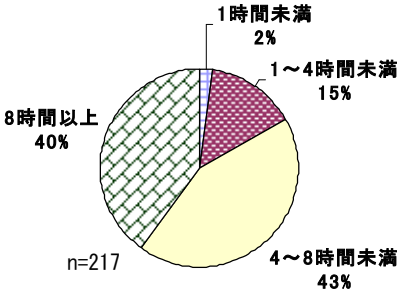
１）圃場間移動時に感じる危険状況の中で多かったのは、「夜間走行（37％）」、「対向車とのすれ違い（32％）」、「トラクタ全体が飛び跳ねる（26％）」でした。

２）エンジン出力40kW（55PS）以上のトラクタを利用している者は、「後続車のわり込み」や「対向車とのすれ違い」など他車輌との関係に危険を感じている割合が高い結果となりました。

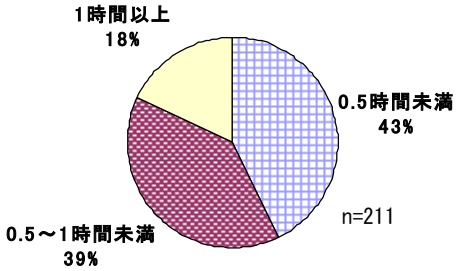
農研機構

お問い合わせ先

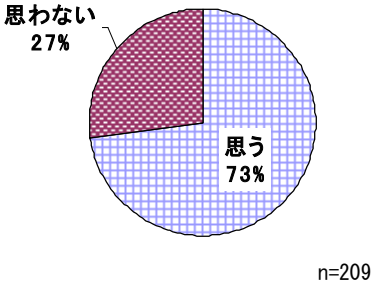
生研センター 基礎技術研究部長 後藤隆志
広報担当：企画部機械化情報課長 藤井桃子
〒331-8537 埼玉県さいたま市北区日進町１丁目40番地２
TEL: 048-654-7000 FAX: 048-654-7131
Email: info-iam_kisobu@ml.affrc.go.jp
生研センターURL: http://brain.naro.affrc.go.jp/iam/



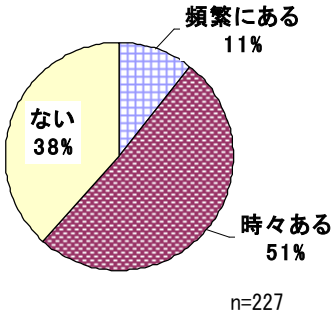

１日の耕うん作業時間



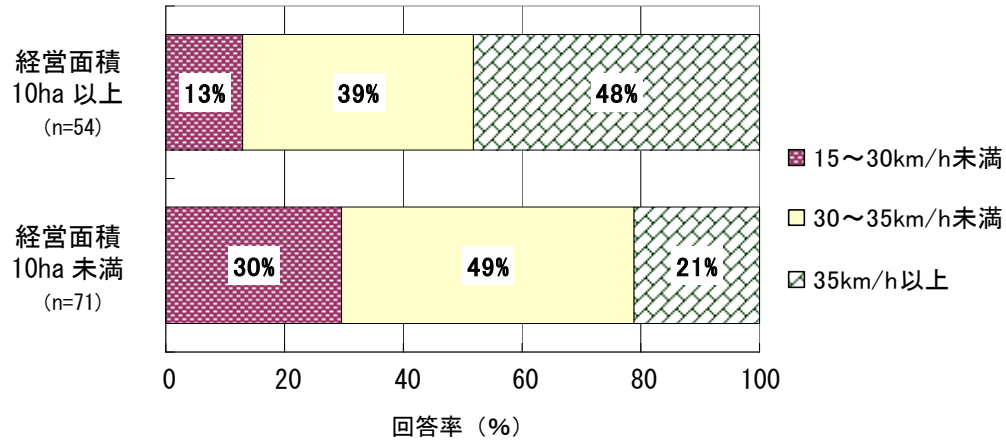

１日の移動時間



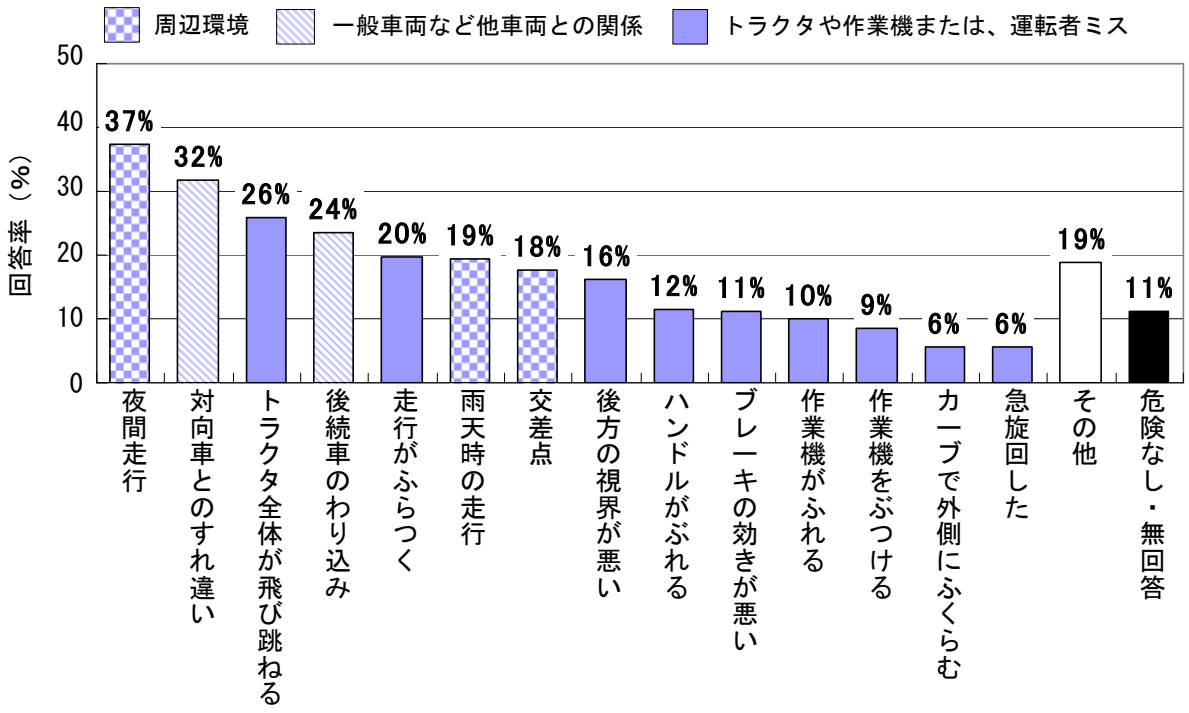

乗用型トラクタの高速化は
経営面積拡大に有効か？



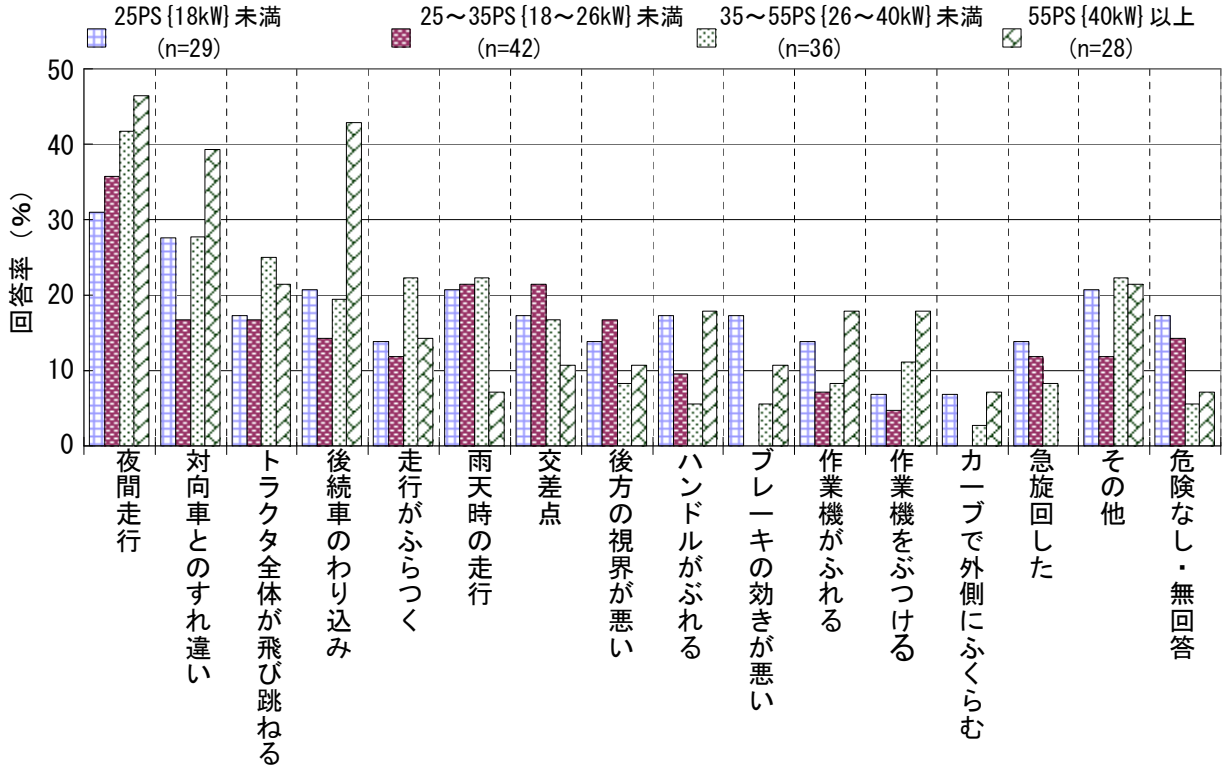

乗用型トラクタの高速化を
望む時があるか？




乗用型トラクタの高速化を望む場合、希望走行速度は？




圃場間移動時に感じる危険状況




乗用型トラクタの機関出力と危険状況